

新鐫

椿說弓張月

續編  
卷六

~13  
3908  
18



へ13  
3908  
18

鎮西八郎 椿説弓張月續編卷之六  
爲朝外傳

東都 曲亭主人編次

第四十四回

尚寧王戲言あま禍を喚ぶ  
中婦君の悪報創よせられ

尚寧王の三十八年丙申即日本安永二年秋九月七日夜丑之の比及中婦君  
俄頃小産の氣つれ多しぬ。このありて宮女内官亦奔走  
す。経小産相利勇いそ死ありて産室へ冊に入。女官長醫所  
といふも漫々出居る。こと許す。尚寧王を緯の鏡かほく。  
天小産ひ地と欲ひ産室へ使をよす。安否を問ふこと。只是  
擲の齒を挽かす。いく程もなく。王子誕生す。はして母子安  
泰る。とまらひ折ら。曠雲忽然と塔の下より當下尚寧王の



矇雲が宝位のはよりに言のふして満面が笑みか合と國師の神  
 著空一かふびして王子誕生せり。つが兒恙なく生育べれや久後の  
 吉凶を説きし人のと仰されの矇雲これをしらけあり。殿下は  
 安く思われよ。曩も密に皇世ごとく。王子の權者の後身小  
 海はせの聰明叡智世に傳りて壽命の天地ともいふ善しるべし。  
 今中々昔宮が宮にて世子は立二二歳よりありあり。速に位を傳  
 ぐ。万機の政をまじしる人。あつたば邦家もよく泰平にして士民  
 徳化ふ浴し。道ふ迷ふを拾ひて夜戸が鎖とて竟風舞西五穀  
 を播して。終る賊民あることあるん是併殿下有道の餘慶おこも  
 とす。せしむ。王限りなく致ひて産育等閑なるとぞ。慈愛ある  
 小利勇の腹心の家隸何しが妻をあの姪あり。さしひくらん。と  
 乳母は進ぶし。まててつが方人のとに薬餌をまてせしむ。衆官足  
 次疑ひ中婦君年の齡五十ふらう。月来氣子孕くるともゆめあり  
 きて猛小王子が産まふこといと怪しとて竊に謀りありめあれど。  
 矇雲利勇が権威を怖とて。明白ありしはもろく。忠あるりの  
 これを歎れ。傳人のこれを祝して媚にその寵を求むも多うり。さか  
 する。四五十日が産て産室よりりの日子果母子既小肥まふ  
 小なれハ尚寧王ハ。その矇雲小吉日良辰を卜はし。國中に大赦  
 あり。北谷の阿公もとて罪あるりの免し。本日。司百官が龍  
 宮城へる集合て。王子降誕の宗賀を受海鮮野味烹調蒸炙  
 の珍膳をばねて。酒食を賜ひ樂正塔下に候とて天孫歌太  
 平調木の并樂が奏と。この日東風平の按司陶松壽のそ。こら

煩しとてふ。空位の右辺。中婦君鳳冠。霞帷。被  
て王子。次姉母。抱。水晶簾の裏。あり。左の。こ。あ。矇雲。國師  
黄冠を戴。袴衣。蕙帶。侍。せり。その餘。國相。利勇。と首と  
て。法司。紫中官。按司。黄帽。官親。雲上。里之子。小。至。る。まで。官帽  
を正。袖をつ。ね。斑行。く。之。跪。九。叩。ひ。の。乳。行。ひ。こ。な。万。歳。と。を  
祝。し。ま。う。し。り。れ。か。て。糸。樂。も。果。し。る。尚。寧。王。と。利。勇。を。近。く。に  
卿。ホ。ま。ぐ。く。つ。る。兒。の。震。器。が。稱。贊。さ。ま。り。て。今。より。東。儲。ま。ま。ん  
と。ま。へ。も。彼。生。ま。て。の。ま。ご。百。日。を。過。と。才。器。が。く。に。稱。さ。る。ゆ。  
よ。し。か。れ。お。似。こ。り。あ。ら。ぶ。百。官。の。幼。れ。を。侮。り。あ。て。從。ぶ。る。もの  
あ。ら。ん。歎。この。あ。ら。ぶ。あ。べ。た。と。同。お。利。勇。答。ま。う。ひ。や。り。王子。繼  
縁。の。中。に。在。せ。も。原。足。後。者。の。後。身。ま。り。且。殿。下。の。聖。業。既。お

六十。あ。の。ま。う。り。多。へ。世子。次。ま。り。れ。ん。る。中。國。と。せ。と。し。る。こ。聞。ら。れ。と。や  
近。属。富。翁。河。の。上。小。振。子。集。合。と。く。民。謡。と。その。謡。お

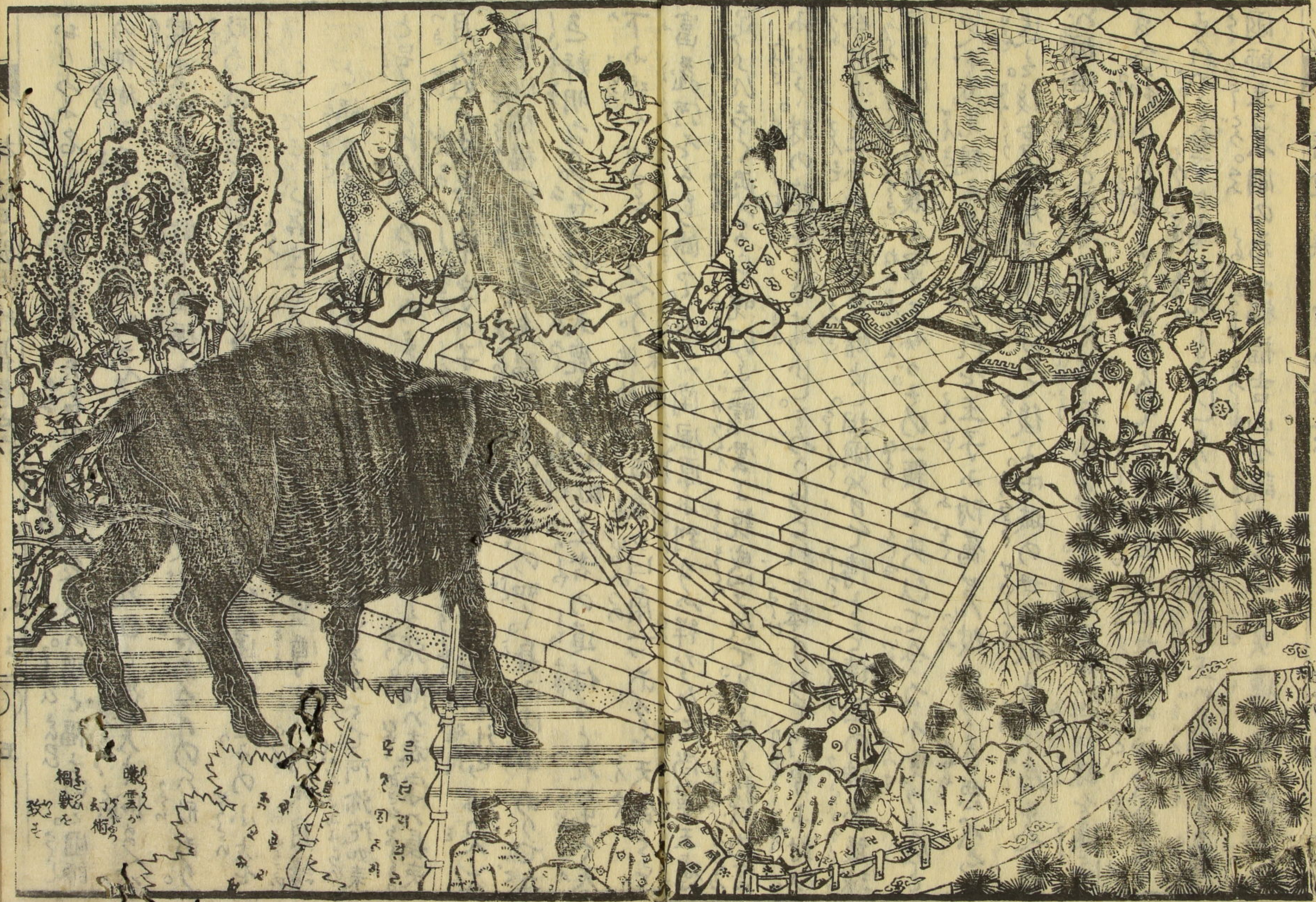
神人來兮 富藏水清 神人來兮 白沙化朱

と。い。ふ。これ。則。王子。降。誕。の。前。象。ま。り。踏。踏。ま。ら。り。と。憚。る。意  
ま。ら。り。ま。う。せ。し。る。王。か。ま。り。る。曩。あ。ま。れ。舊。虬。山。の。虬。塚。を。芽。起

惡神來兮 海潮不消 惡神來兮 白砂化蟹

と。い。ふ。こ。り。あ。ら。し。て。國。師。忽。然。と。出。現。と。ら。れ。何。の。こ。ら。ま。り。と。同。お  
利。勇。答。ま。う。ひ。や。り。矇。雲。の。氣。色。を。と。く。ら。ら。微。笑。斑。と。と。ま  
め。て。ま。う。ひ。や。り。殿。下。ま。り。と。曉。ま。ら。り。曩。お。惡。神。來。兮。と。淫。心  
ハ。王。の。世子。ま。り。ら。る。寧。王。女。を。り。て。東。儲。と。し。ま。め。を。請。け。り。か。く

王女が焼くのみ因て王子降誕志多しねされハ神人來つと  
 稱讚と惡神と殿下の御流すらばら。王女がらハ神人ハ權者  
 の後者ハ在と王子とすうひあり。天にはし人をりていししれ乃  
 常言空一かゞぞおのりつとや。とちもいしく回答し利勇もあつて  
 あつたつと嘆賞と中婦君ハこのははは笑て斜るふは故と殿下と  
 て狐疑しもの。かたは祥瑞あるものを誰か否し侍るべし。とや。立世子  
 のふを議定めはしめいしととてりり。嗚乎これ何等の妖言とや  
 往時尚寧王忠臣の諫を聽と虬塚を發て不覺ハ惡魔と走らせ  
 曠雲遂ハ團中ハ横行とるなりて惡神來つ白砂化蟹と童  
 淫せり。今亦神人來つ富藏水清と童淫するもの源為朝王女  
 を扶掖て小琉球より。團改の浦に著せり。久志金武の間切とて  
 富藏河をらら涉て。遂ハ南風原ハ到る祥なれを尚寧王慮  
 足らばとく。兩ながら曉はと曠雲ハ説感されて。まことと説ハ内宮  
 小仰と。珠の箱をとる事し。さうらこれを捧りらて利勇ハ對ひ  
 今日より王子ハ立と東儲と相國ハりて傳とと傳國の神宝琉球  
 二顆の珠ハ曩ハ寧王女がその一顆を失ひて。今も不完とて  
 といも。先規おまじして。これを王子ハ附屬せん彼りの善惡ハある  
 迄も。後宮ハ艱育し。あけて後ハ中城の世子殿ハ移し居とべられ  
 相國且くこの珠を守て等閑あるを説と。件の珠を還し  
 人の利勇ハ恭しく受おさめて。三司百官ハ立世子のふが令と  
 されば。さる万歳と祝し。且して尚寧王ハ又曠雲ハ對ひ  
 國師年來國のふハ禍福吉凶を説示と。一貞違ふことなし。



新訂巨魁月續備卷之六

相見  
致  
の  
術

目  
録  
の  
目  
次

おりのふ名めれば必形あり。夫名ありて形なれば禍と福との二師の神術小因と。その形又入ること大はつべれ歎と微笑と同多。蒙雲回答く。殿下禍福お形なしと宜へども名ありのの形あり。形ありののあつては名あり。望月日の悠遠にしてその小大を量かざればと。名字あり日本あり。日大日靈尊。月讀命と稱又さらえ男と異名と僧家小日と。阿弥陀如来と号されどもそのころとあるじ亦日の姓を張名に表字に長吏月の姓に文名に申字に子光と老子蘇土藏中経。潜確類。み入んて況禍福の形をや。夫福と其の形牛の如く。身小肉申のりて五色鮮明なり。名づけて天鹿と。王者の道徳とこれの出と天。下小福んしとと。沈約又孟康曰角一。あるを天鹿と。西角。蓋天鹿辟邪の獅子の属。揚用修あり。天鹿。蝦蟇の大方の。その謬こと甚し。潜確類。近ごろ宋の哲宗の元祐年間化して道士となりて市おむび。益言。聖人と稱ふ。風俗或は宋の仁宗の時。古今。一名の福祿壽又南極老人と号し泰山老師と稱ふ。五雜。天竺ありて吉祥天女と号く。一名ハ切徳女人のハ猛利福德の夜報ありといふ。その形馬幅ふ。んえ。東方ありて。その名を幸魂と稱ふ。日本。その名異なるれども。その物ハ福をいふの之亦禍ハその形牛に似て。頭ハ虎のごとし。これを鬼門と号く。往古黄帝神荼鬱壘。これハ捕て虎お餌。風俗。唐の玄宗帝の。元祐年間。さなりて帝の夢よりて。ぶくら。虚耗と名生り。揚貴妃ハ續香。

天鹿の...  
 宋の哲宗...  
 元祐元年...  
 八日本城...  
 河院寛治...  
 二年...  
 八年...  
 九年...  
 十年...  
 十一年...  
 十二年...  
 十三年...  
 十四年...  
 十五年...  
 十六年...  
 十七年...  
 十八年...  
 十九年...  
 二十年...  
 二十一年...  
 二十二年...  
 二十三年...  
 二十四年...  
 二十五年...  
 二十六年...  
 二十七年...  
 二十八年...  
 二十九年...  
 三十年...  
 三十一...  
 三十二...  
 三十三...  
 三十四...  
 三十五年...  
 三十六...  
 三十七...  
 三十八...  
 三十九...  
 四十...  
 四十一...  
 四十二...  
 四十三...  
 四十四...  
 四十五年...  
 四十六...  
 四十七...  
 四十八...  
 四十九...  
 五十...

囊と上の玉苗を盗去らんとして鐘馗の神君不駭らる事文類引  
 天竺にてハ黑暗天女又黒耳女と稱人間ハ禍と云逸志日云云  
 相貌究く醜惡く俱舍論又祖庭日本ハ亦形をいりて只その  
 名を麻我通未の神と稱ふ麻我通未とハ禍神といふよし  
 東方の古言ハ禍を未我としり日本又悪古又を麻我許登と  
 訓したる万これ則曲アて直くぬを志すといふとそその名を送す  
 異なれどもその物のいふる禍をいふる抑福ハ未しかくして禍ハ招  
 け易し殿下まづいづれの形を問はれ神の隨ハこれを致さし  
 と緯精細小意チウせし尚寧王これをマメク振然と打笑ハ  
 國師かくのごく博識微妙の神術ありこれその難れを後述して易  
 れを先おせん速ハ禍の形狀を見せし宣ハ矇雲いと易れり  
 と應つ口ハ咒文を唱へ印相して眼ハ因志じありて外面をじ  
 招くハ忽地筑登之ホ五七人怪ハ獸を鐵の鏢りて斬断つ牽て  
 庭上よとありりさてまうけり臣亦目今御苑の中ハ于てかゝる  
 獸を獲りそのぶまひいんもなれも名をごふあるりのまり  
 一ご直まの覽ハ伎なりと交えあられハ利勇仰を直示て獸ハ  
 皆下ハ牽居は君臣存くこれを見るハ形ハ牛ハ似く頭ハ虎  
 類せり當下尚寧王ハ矇雲を見えりて國師ハ獸ハつ國  
 此未嘗有のりその名を志じゆへと仰且ハ矇雲うけありりこれ  
 則同く多く禍ありりとまらびニ司百官これをびて駭然と驚き  
 怪ところハ忌嫌かりりのは王又矇雲ハ對ハ國師ハ神術ハ  
 ぐこれ目前ハ禍の形狀を見ることを得りりそもこの獸ハ何の能

此未嘗有のり

三



紅酒の味  
球の鳥  
太平山  
て醸する  
酒の味  
小紅

あり。と同一の人の味。雲雲然として。殿下彼常言と笑ふ。や。福  
 福小門は只人の招く処。妙あるといふ。國君を道にたづねて。國  
 には按司を道なれば。その城を喪じし士。廢人を道なれば。その身を保  
 びしむ。これ此獸の能なり。と。さういふを尚寧王もあへて。飛彈して  
 して。八番押する。そのあつた。さう。牽退よ。と仰。且。雲雲つと。身  
 成起して。冷笑ひ。暗君。さう。禍を招くこと。久し。彼いそ。退くべし。  
 中婦君荒淫。はして。後宮を濫り。國相利勇。權を弄ひて。寧王女  
 を。追討民間。赤子。赤子。奪ひ。さう。して。中婦君の産りと欺く。さう。成  
 りて。國民。齒を切。按司。黃帽。恨を。含。り。の。ま。既。お。その。禍。と。本  
 して。これを。退。ること。中。あり。といふ。その。言語。い。ま。ご。泣。ら。ご。いと  
 軟弱。と。い。え。る。怪獸。奮。然。と。して。怒。れる。形勢。眼。へ。百。煉。の。境。お  
 朱。を。洗。れ。こ。と。く。牙。の。千。口。の。劍。を。逆。に。裁。る。ご。と。く。一。声。啼。り。ご。忽。地  
 濼。を。引。断。離。玉。吐。再。閃。り。と。跳。あ。ぐ。り。て。尚。寧。王。お。飛。か。れ。へ。王。の。愕  
 然。と。駭。れ。怕。と。撲。地。と。仆。と。て。揮。切。あ。ひ。ぬ。中。婦。君。の。の。形。勢。お  
 且。驚。を。且。怕。れ。身。が。踏。し。て。遊。人。と。す。れ。を。禍。獸。ハ。脱。し。も。中。さ。直  
 小。向。勝。折。し。仰。ま。ま。に。踏。お。ど。さ。と。い。と。あ。り。中。なる。右。の。足。を。お。の  
 前。足。が。て。楚。と。踏。ま。え。左。の。足。首。に。牙。を。ま。と。り。あ。り。く。と。引。裂。や。と  
 小。中。婦。君。の。叫。苦。と。叫。び。も。果。を。皮。破。と。肉。開。け。て。二。足。の。紅。絹。を。引  
 に。似。ら。り。傍。お。あり。た。れ。乳。母。姉。母。お。の。魂。更。お。身。に。ま。て。王。子。が。撲  
 ち。多。か。か。れ。抱。さ。り。走。り。避。ん。と。す。れ。お。足。さ。感。る。中。さ。て。は。も。ま  
 是。是。彼。腎。の。肉。を。啖。さ。り。て。鮮。血。と。と。流。し。出。平。山。紅。酒。と。醸。り  
 亦。是。後。宮。の。細。腰。が。差。込。ひ。蜘蛛。飢。て。螺。螺。似。ら。り。利。勇。の。これ。を

春見り長...



禍獸一  
怒て悉  
映せし

林語野用續篇卷之六

えて吐嗟とむり忙しく王子やうのう。波鼓を跳こえり。幸しく出ん  
とさうふ禍獸はまきく在ひく欄干と突毀る。花鳥のまき追ひ逼  
る。裳衣丁と嚙笛は。利勇の髪らうの境もつたまへと。見え  
てまがら禍獸の額をのぞいて手お持し珠を撲地と投たんとて  
明珠の徳や怕とる人。ささうれ猛獸軟くして。耳伏せ頭を低つ  
後巡るその間。利勇の王子を懐しお入とく。喘く脱と出歡會門  
のめまに繫やれ馬お囚りくらり跨。南風原に投て逃去りね  
かして経ふ之司諸按司親雲上里之子筑登之木面まこころ土の如  
くおりて。遊人とさるふ足癱麻て雲むりも動れ好も戦慄く  
せんまへ。國師願くお救ひま救ひまと叫び。暎雲の裳を  
結んで。空位ふを素と推あう。長く黄くを鬚を握抱て高かふ  
うら笑ひ時するう。尚寧王暗思し。政事道お稱とて天

孫氏二十五代一万七千八百二年の正統ころお断絶と。衆人など  
て曉らる。淫婦中婦君齡半百にして子を産んや。利勇の懐  
まき脱去され嬰兒ハ彼亦密お民間に募り。その母を殺して其  
子お棄し。王子と稱するのなり。唐山の往古ハ徳  
のる人お讓て。天下に治り。ひが徳より。天孫子お代るし。世  
ホられお後り生れ抜くが立地お死人。かぐてもなほ惑ひ。禍次  
怕とさやお暗れをまき明れお後ひとむに歡樂して福を子孫  
お傳んや。さう回答せよ。といふ。衆皆これお笑て首を叩け。神仙  
道德高くして。天子大業お受まへり。維つそのほらるのみ。顔  
ざん人臣木柱石のたしとくとも。犬馬の勞を竭し。ひる人速

丹位にんゐは即すなはち多おほくしと阿波あは渡わたひ。一人おそくおほく外とほ起たりて利勇りゆうが投捨なげする。  
 借園かいくの明珠めいしゆを取とり進すすむとれハ矇雲もくうん大おほに欒らんびて件くだんの思獸しじゆを  
 さし招まねくハ禍獸わざはひじゆハ尾おしを掉おろし御おんとるこころ。矇雲もくうんがほとりの近ちかく来き  
 て忽たちまち地ぢ一顆ひとこの珠たまを吐つつ矇雲もくうん足あしをこんく驚おどろれとるおりの也なり。こゝ疑うたが  
 ぶべうゆめゆね曩なほ小寧せいの王女おひめの失うしなひくる珠たまもこれ今位いまゐ小即せうすなはちお及およ  
 びて琉りうと球きうと二顆ふたこの珠たま陰陽いんやう全ぜんく聚あるこ天てんこの祥瑞せうぎを降くだり  
 似にたり。御おんホ今いまより推おしするびてそれを矇雲もくうん法君ほふきみとまうせよとほこり  
 かお告つげちしし二顆ふたこの珠たまを玻瓈はりの皿ひらに盛のりて衆人しゆじん小指せうさし示しせ  
 こゝ万歳ばんざいとぞ唱となる。この條じゆのゆひのよとて矇雲もくうんが幻術まじゆめて當初そうしゆ  
 一顆ひとこの珠たまを盗ぬすむとり今いまこの獸けものは吐つつ衆人しゆじんハ惑まどむとるかく  
 矇雲もくうんハ群臣ぐんしんの慶賀けいがを受うけて王わうと中婦ちゆうふ君きみの亡骸なつかいを薄うすく葬むすじ  
 さていふやう。利勇りゆう今いま偽いつはり王子おうじハ輔佐ほそさして南風原なんふうげんの城しろお籠こもるとも  
 怖おそるに足たらんと只ただ悔あやまりて東風平とうふうへいの按司あんじ陶松壽たうしゆじゆの件くだんの松壽しゆじゆ  
 ハ原素げんそ毛圃もうぼ典てんハ腹心はらこゝろのゆめて密ひそに廉夫人れんふじんの妹いもうとなる余婦あま真ま  
 婦ふと夫婦ふうふの契約けいやくをいじ偽いつはりりて利勇りゆうハ佞媚へいびび貳ふたかたゆめと  
 中城ちゆうじやうの討うちをうけたりて查園吉しやくゑんきちと鏢しやくハのし王女おひめと夫人ふじんを  
 救すくんとするハ事急こといそして廉夫人れんふじん遂つひハ自殺じそくせし。その首くびをめて  
 利勇りゆうハ斬きり一方いっぽうの園ゑんとどして後うしろでとく王女おひめを落おろさんと計校けいけうが  
 利勇りゆうハ海兵かいへいを退ひけとるさるかくハ真鶴まがづが死首しきうハ刎きつて王女おひめの牙くは  
 かつりし実まことなれ功こうは因より。按司あんじハ拜任らいにんせられりゆ。これこの  
 千里眼せんりがんをりてよくそのゆをあるとしくも。さあ昔むかしあれがこれを咎とがせ  
 るに白しろつめてありとる。これハ利勇りゆうハ。位ゐ小即せうすなはちるはしとせん。

春丸長

松壽をりて軍師とし幼主を挾く軍兵を聚め日うつる首里を  
 攻めんと議すべし。あれども松壽の真実を利勇が伏せたるお  
 あらねば彼が心力を竭せしに到らざれば事速く成べしはやは  
 松壽が此の軍兵をば推よするとも何程の事かある。餘北谷  
 の阿公が徒らな足火に向ふ乞巧の正し。とえて心肝の病ひあふそ  
 只忽ふとてたへ寧王女のもと今武勇勝とて筑登之五十人及びて  
 討まじし猛獸及びて翼とせんこの禍獸がゆくかふゆと向る王女の  
 隠家があるべしとてとく。としとばしとられ筑登之命と稟く。我  
 具し剣を帯戦を横へ禍獸を先よばして忙しく走去り。さるる國  
 相利勇ハ偽王子をのれ抱れ馬ふら踏ておのふ采地つらる南風原  
 の城へ逃入り俄頃龍城の准伎をまんちりる。この日東風原の首  
 松壽ハ立世子の沙汰ころをねがされ病は假托し首里へま  
 ぞあるおその日申の比及ふ南風原より利勇が騎馬の使者ま  
 王と中婦君のまくなりあひゆるはし次告す。これを招く。好むび  
 と遍ふ及びく。松壽ハ大お驚とて勢勢四五十人をおく南風原  
 お赴れその夜利勇お合會し。間者を首里へ送して律の爲体  
 張るおふ。そのりの翌朝走り及びりて曠雲位が墓で中山法君  
 と稱るといふも幻術お怖と惑ひく。三司諸按司彼を討んとせ  
 どもや悉属後ひてぬと告し。利勇ハ只呆れ果て。せんぞんは知  
 らぬ。さりとておひく。中山山南山北の諸按司へ雞毛の檄文  
 を走て速お我兵及び起し。逆賊曠雲を討滅し。王子が首里へ  
 入と位即進せんはし。次謀るお。或ハ利勇が累年の奸悪を

春説弓張月續篇卷之六



知主  
扶  
利  
南風原  
軍

木言巨野月純篇卷六

善記

憎む。或ハ禍獸ノ為ル族滅せしめんうと陸にて。さうしくその暮  
 小意とるりの好く。大里真和志。佐敷玉城。知念具志。改麻文仁。  
 喜屋武。真壁。豊城。小禄。とて。十一箇。同切の軍兵の。と。あふく  
 催促。子。隨ひ。と。出。ま。り。より。て。利。勇。ハ。松。壽。が。り。て。軍。師。に。阿。公  
 を。偽。王。子。の。傳。と。し。溝。が。深。く。し。堀。が。固。く。し。只。か。の。禍。獸。を。防。ぐ。の  
 外。と。あ。い。じ。う。れ。ず。も。あ。ら。は。松。壽。も。又。お。り。所。あ。れ。ば。志。と。さ。ふ  
 致。さ。と。只。し。と。づ。つ。ふ。日。を。過。さ。と。い。に。利。勇。ハ。頻。々。焦。燥。て。同。切。毎  
 日。牌。が。う。し。つ。朦。朧。雲。が。滅。と。へ。た。勇。士。も。欲。得。と。て。募。り。り。

茅四十五回

偽王子を挟み利勇軍兵を聚む  
 赤瀬碑お苦く王女鳥朝と逢ふ

寧王女のいぬる九月二日の暁昏ふ越来なる石橋の  
 思少年が為小既お秘もさうひぬとつんさるおさうも白猿の  
 冥魂お助られ心死と脱とて。因納藏おけ入り。その暁かとおひ  
 了う。提牌金查國吉が中城あぐ利勇が夥兵が破らじ辛  
 あぐこの山中へ走り。懸んとする。小環會めひおくれ。主従送  
 小紋あぐり限り。王女の廉夫人の安否。真跡が忠死のみと。  
 いひおぐらら泣き。査國吉ハ。又。浮。亀。母。子。が。り。て。告。げ。ま。か。り  
 せ。又。さ。う。い。や。う。某。こ。へ。ま。つ。る。途。中。路。人。の。う。ち。泣。き。を。せ。く。お  
 廉夫人ハ。このお怒れ。ま。り。と。つ。ん。その。中。實。言。う。り。せ。ぬ。いと。痛  
 あく。こ。を。と。ま。う。い。を。王。女。ハ。笑。も。あ。く。と。涙。ハ。只。驟。雨。の。降。を。い  
 め。轉。輾。て。そ。泣。き。ぬ。この。と。れ。白。燈。の。冥。魂。ハ。王。女。の。身。お。さ。り。て  
 の。り。ん。声。さ。ま。も。日。来。お。か。り。ぬ。の。査。國。吉。も。さ。ま。づ。に

いひ慰めはかりすはふ。獠者りれはる。夫婦のりのおぼしれは忽然  
 と出まりて。王女のほとりの山へ琉球第一の高峯ふ  
 て人もかよらぬ。世代潜ひあふるふよとれど。蛇毒猛獸の患ひるに  
 由しものよに。おのれは夫婦ハ。読谷山のはとりに住居する。山幸  
 形り。おぼしれはる。家おぼしれはる。公の及んぬ。全荒れしれ  
 ざし。とらふ。かくまて。つらう。ありて。忠公り。誘引する。ふ。隠さる  
 う。く。に。あ。り。おん。とおぼせ。王女のそと。査國吉は。注目し。あ  
 び。査國吉そのころを。件。の夫婦。お。對。ひ。汝。亦。う。推。量。の。て。く  
 ら。ふ。ゆ。き。と。こ。寧。王。女。お。お。つ。と。る。か。れ。迷。母。中。婦。君。嬖。臣。利。勇  
 矇。雲。ホ。が。る。お。ん。身。の。お。れ。処。多。く。な。し。も。入。も。一。旦。雲。用。け。て。天  
 日。を。入。ま。ふ。時。し。な。か。ん。や。こ。も。か。く。ゆ。て。舍。藏。進。く。よ。世。お。出

る。恩賞へ乞ふ。おぼしれ。と。説。示。を。に。夫婦。お。ひ。あ。の。が。衰。老  
 脱。主。従。子。被。せ。進。し。せ。御。導。して。讀。谷。山。の。白。屋。お。立。か。り。  
 い。と。貧。し。く。ん。世。を。怪。營。め。ど。公。と。り。の。信。く。く。飯。も。と。炊。く。歎。待  
 たり。あ。ら。れ。よ。その。夜。より。査。國。吉。が。子。癩。い。と。と。出。く。遂。お。破。傷。風  
 ふ。あ。り。な。れ。が。十。月。の。中。旬。よ。到。り。て。中。癩。の。半。愈。く。く。さて。獠。者。夫。婦  
 の。毎。日。お。山。に。入。り。て。夫。の。獸。を。獵。く。し。妻。を。薪。を。推。り。或。ハ。磯。お。り  
 して。海。蘆。を。拾。ひ。て。活。業。と。し。つ。有。一。日。件。の。夫。婦。い。そ。お。し。く。走  
 り。え。り。く。寧。王。女。主。後。よ。ま。ら。ひ。争。う。い。ま。ご。首。里。の。形。勢。お。は。り。召  
 出。さ。し。や。あ。り。と。れ。此。度。中。婦。君。の。お。ん。腹。お。も。れ。せ。り。入。れ。王。子。次  
 世子。お。ま。ん。と。て。この。龍。宮。城。よ。三。司。官。渚。按。司。と。召。集。合。する。折  
 か。矇。雲。例。の。幻。術。め。て。禍。獸。と。言。ひ。ま。と。怪。獸。し。て。王。と。中。婦。君。は



嘆ひ殺はしおのれ宝位おのり奪りては。さうらう法君と稱し忽地三省の  
 地を并呑す。國相利勇の卒じり王子がうた抱と。南風原は逃之  
 了く。松壽阿公亦くもに事次議し。彼是も屬洗して軍兵を振  
 じし。矇雲がら滅して王子を位母即ち人謀と謀し。賢なも  
 愚るも。さう彼禍獸小怕害て。その募母恋せと。利勇のい  
 ことつるさお間切毎牌がらして。さう勇士と募ると。借國乃  
 宝珠も失くる一顆。入矇雲がら小流く靡れ後ぐるの稀く。さ  
 あうて。矇雲ハ筑登之五十人分付して。彼禍獸を牽し。王女次  
 りしるひも。人あふ。さや麓よ追ひ到せり。某夫婦力と場く。  
 ちんじが殺ハ御れ。苗へたれど。こに在るん。ゆるも危し。さうくこの山  
 次西へく。海邊へ走去人あつ。つら虎は脱と多るあふ。  
 とすらしものく。亦外面へ走り出づ。王女ハ父王の覺り多るは。か  
 父も果も。さうさうもいうか。とばりの声を惜ごうと。悲傷ハ胸う  
 塞りて。阿と叫び。倒し多るハ。查國吉。慌忙と扶起し。慰んとさ  
 かも。又遠恨の涙とがめあふ。やうやれ多ひして。さうくよひ  
 勵し。さうく落多くと。勸めさうらひ。王女ハいよう好し。沈てまらあ  
 て。さうさう。つが。王女とせられ。不幸にして。艱苦不堪といひ  
 殺しを敢る。世は存命する。何のたを。罪うたは。し。ひひとて。  
 御免うらぶ。りてん。とさう。あう。お母ハ枉冤ハ。怒れ。父王ハ人禍獸  
 小。おん身を。あう。され。身と。せて。いう。て。命を。惜ひ。へ。熱。中。頭。身。の。息  
 のれ。バ。こそ。抱。をも。かり。矇雲。が。賊。兵。の。所。に。ま。る。ま。る。し。も。あ。ら。は。ん。  
 刃は伏く。これ死ん。脱去ること。か。と。宣ハ。され。ハ。查國吉。声。次。あり。ま。

椿説弓張月續篇卷之六

ころのひびひるなれば形勢うねり逆賊蒙雲を討亡し國中を掃清せし  
 ところも孝ともさうさめ日本のしめくはやくに仲良天皇の右氣長  
 足雅尊神功皇后のころから鞍の軍兵をおて三韓攻入討後へさし  
 男見まじく冠を冠せぬの致しと朽とと練勵し遂に王女扶  
 掖を擽者のまを走り出さるあてもめは夫婦のつらさの世を避  
 ころあてかくまて志の信守るあり今の時ふ當て大臣按司も阿容  
 阿容と蒙雲も属徒とてさくらのみかすらす立するなる心操  
 こそ有難うれと頻り賞嘆あつらふ王女もうち島改めひてそれ  
 ちあふなり彼ホ冠を御ぐさく走り去るうう移れやあつると主従  
 育しく出かかたえんこれ今やをありつる擽者が萍屋へうれ消  
 かりにええもさうてぬりうね一本の松のとまて主従の形勢ふ  
 の中へる限りも。原来件のりのも山紙なごめてゆんさるる  
 日よそれが住家として起外世に彼処なる壽松の樹蔭あてありけり  
 ととせや曉はてりうもふあせしそさく伏拜こ又山路を西へ下り  
 て浦曲やうと走りまふ。清処お喇い噴噴銅鑼鼓の音日海山中響  
 こころて墨墨しく寧王女脱しなせそと罵りつ。蒙雲が賊兵四五十  
 人もやく器械を引提て追蒐する怪れ獸と真先お駈立て既ふ  
 事急つりしう。查國吉信とええりて某ころに命を捨る王女へ立  
 地中惡獸の牙おかけられまふへん。さく走りまはしとまじりも果  
 ぞ。劔を抜翳して件の獸を逆へ禍獸の大よ哮り衝と走りきて  
 やま矢庭おうけ倒さんと跳かれを。查國吉信。ちや身も及りてこれ避  
 二つ三遍その後方へまじりて劔を閃く刺んとするに怪れた哉。

新編源氏物語



春記 長月 續編 卷之六



吉原 身を禍 死して 寧王女 舟に 鶴亀 借

續編 卷之六

十七

查國吉が劍ハ三段四段ハ折れて半愈々る金瘡は入一度ハ裂く  
 鮮血流且眩眩て跌く処ハ禍獸ハ牙ハ張り查國吉ハ膝ハ太股  
 のけて啖ひる一揮ふるて振ふるんとさるに查國吉ハははとあを  
 惡獸の頭を抱えとめて捻挫んと互ハ嘯く声五臟ハ絞るに一當  
 下賊兵ホ走り去る。戦はりの。查國吉ハ膝ハ左右より刺や  
 儻に憐むべ。南家曰傾れ。紅粒をらし遂ハ魂散魄去りて黄  
 泉へ流しゆく。勇士の最期ぞめさはしれ。その間ハ寧王女ハ惜るね  
 身も查國吉ハ忠死ハ化せせとあひ入。道五七町流延。中海邊  
 小到了あふ。さうらびも胞兄弟とかば。少年世々く独木舟に  
 せく。王女ハ扶乗し進んせ。櫓ハ推搦ハ掃つ。槽ハ生とせ。船の  
 快こと天飛ぶものごと。瞬間ハ洋中。いと遙かぞうりの。さるる

驟雲が賊兵ホ喘く追ひまらて。いづかに霧ハ掃り。その船ハせ。海に  
 かれど。浪の音の。回答して。船ハ漸くに。述るなり。禍獸も。の遙  
 るる。浪を。涉して。追んも。せ。り。王女ハ。不思議ハ。虎口  
 を脱して。少年ホ。對し。そも。何人の。兒。あ。危。死  
 救ひ。る。名。告。あ。し。い。へ。と。宣。へ。二人の。少年ハ。櫓。械。を。り。る。危  
 難。其。本。兄。弟。ハ。中。城。の。按。司。毛。國。將。が。子。い。も。あ。い。兒。が  
 名。を。請。身。ハ。龜。と。呼。れ。父。國。將。が。討。ま。る。日。親。族。查。國。吉。ハ。情。あ。て。  
 母。ハ。扶。辛。し。と。脱。去。越。来。の。山。中。あ。あ。く。餘。い。西。日。の。ひ  
 ち。な。其。処。あ。も。田。ア。が。り。産。月。な。れ。道。を。り。ぬ。母。ハ。瀕。扶  
 衆。同胞。これ。を。昇。つ。大。宜。味。羽。地。の。深。生。り。と。落。ゆ。折。る。金。武  
 よ。の。西。な。り。る。曠。野。を。過。る。と。兒。母。新。垣。ハ。俄。頃。産。の。氣。は。さ。て。

いふもさへう。獲く橋をかたかちて見の茶を買ひてまんとて富藏  
 川の上五卦たすハ兄が追ひ通んとて同胞を比母の傷が離れに同  
 いと怪しん老女が乃か母親を殺され胎内の見え彼老婆が奈あひ去  
 るのとおほしん哀傷の中うさかた。いんがさうく仇の往なうお結  
 ばりし透恨ハ比ん中うものんばかして結朝母の亡骸を水葬せん  
 て富藏河の上五卦た父毛國丹が亡魂は誘引とこの海邊に迷ひ  
 来りしゆ。その夜の夢ふ父がいつ中う。汝も且くこくに田りて寧王  
 女が救ひなり。小船に乗し進みせ。小琉球へ槽船り。島北う赤  
 瀬の碑のはより再潜せなれ彼赤瀬の碑ハ國祖王孫氏のまらつ  
 のなり。これ曩は王命と奉て彼処に到て幣帛たてまつりてそのま  
 驗灼然たるはしハ面りゆえり。王女辛じて其処に赴た彼碑は  
 のり。遂に禍がわして福あひひまら。この浦は独木松の漂ひ  
 著るとあつた。これ王女の来りたる。遠うらばとちりへ王女のおん容止  
 ハ此れいめて。固様くくなる。衣服を被り入りて。いと精細に説  
 ち。世に兄がなすも。おがなすれも。その愛ハ一貫違ひどかくてを  
 兄おこの処にありて。毎日海に眺りして。松の流とよると。つ  
 樹。今朝もこの松忽然として。岸に若くせければ。王女のお  
 目。遠かたばと泣びく。さうは密にすちらさまりてのひ。果  
 ち。同胞が志がらとて。みだにひりして。涙は。さう。回春さう  
 せ。王女ハこの物語を。領に感賞し。忠うらうお毛按司。その身  
 在。冤に討れく。その冥は。主が救。お。汝が。孝心。せ。備。稀。あり。  
 鳴。采。この父は。して。この子。あり。亦。憐。む。べ。た。ハ。新。垣。が。横。死。する。世。あり。

吉野の記

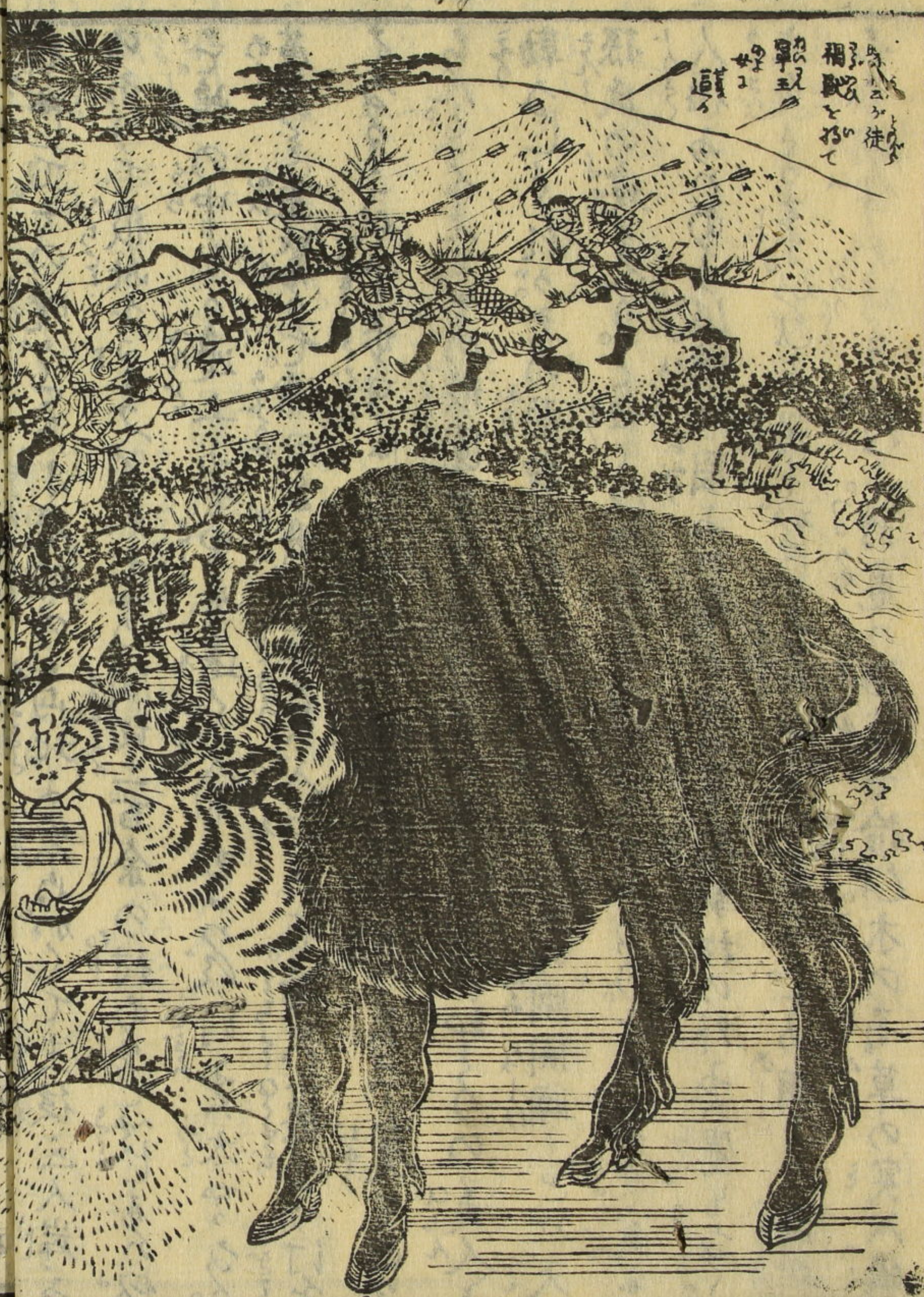
人ぬも捨られ。つづうへん屑うつる富貴三省有る父王を  
 禍成晚と多つて妖賊は位成墓と獸の牙あかけられた。墓うり薨  
 ろひぬる過世の中は命運うり抑ふが中城の世子殿成脱と去  
 より。廉夫人真跡。查國吉本恩も答く命を預せ。じやありど  
 め此こころの終は箇様くくなること。流谷山なる。獠者夫婦が誠  
 心やうてあつてもろく銃をじ。おん目成拭ひつ。又宣の中。流谷山の  
 獠者夫婦へり。汝ホが亡父母の假は形をあらじと。それ女宿じ  
 とうやめらぎや。死しての後も主成救ひ子成あふりのかくまて有  
 たりりの歎と松谷は漣へつ。啣く人へ流龜なるはう悲しく中  
 小涙はじらさるり。さて流谷山下の海邊より。水行三日なると  
 小琉球へ到るたよ。この船の走ること。射る矢よりも速されと水の上

穂也して。その曉ごと小琉球の島北よ急ぬかくて主後之人岸お  
 のりて。彼此をええうらむ。七ツの間切二百余の村あり。とびしあ似  
 と。嶋の中なる邊土あて。里も遠く人も多り。竹や太やある。  
 蘆の生繁りて。浦風も戦た。左右へ入江はして。路只一條あり。汀を  
 えうらるり。十歩可はして。赤瀬の碑ありけり。高さ二丈もある  
 らんと。ええて。その形圓なれ柱のごとく。碑の面もゆるりの美人を  
 勒まじとれが。その面貌さおづら生るがごとし。この國開闢とて天  
 孫氏の建ま入り。とせくにひひりて。傳るもらるり。その景迹実あ  
 人傳あふらび。碑の周あ。藓といふ草。磯馴松の外あ。塵もな  
 上々たる事。いひも竭がじ。王女のあ。あまも入る。その朝より。瓜折  
 志々。彼碑。精ろふ。流龜へ海蘆を拾ひ。木の子。草の実。摘

春全三長月経集卷之二



春の長月廿五日



相殿とて  
朝五  
朝五  
朝五

持説可別片續存卷之六

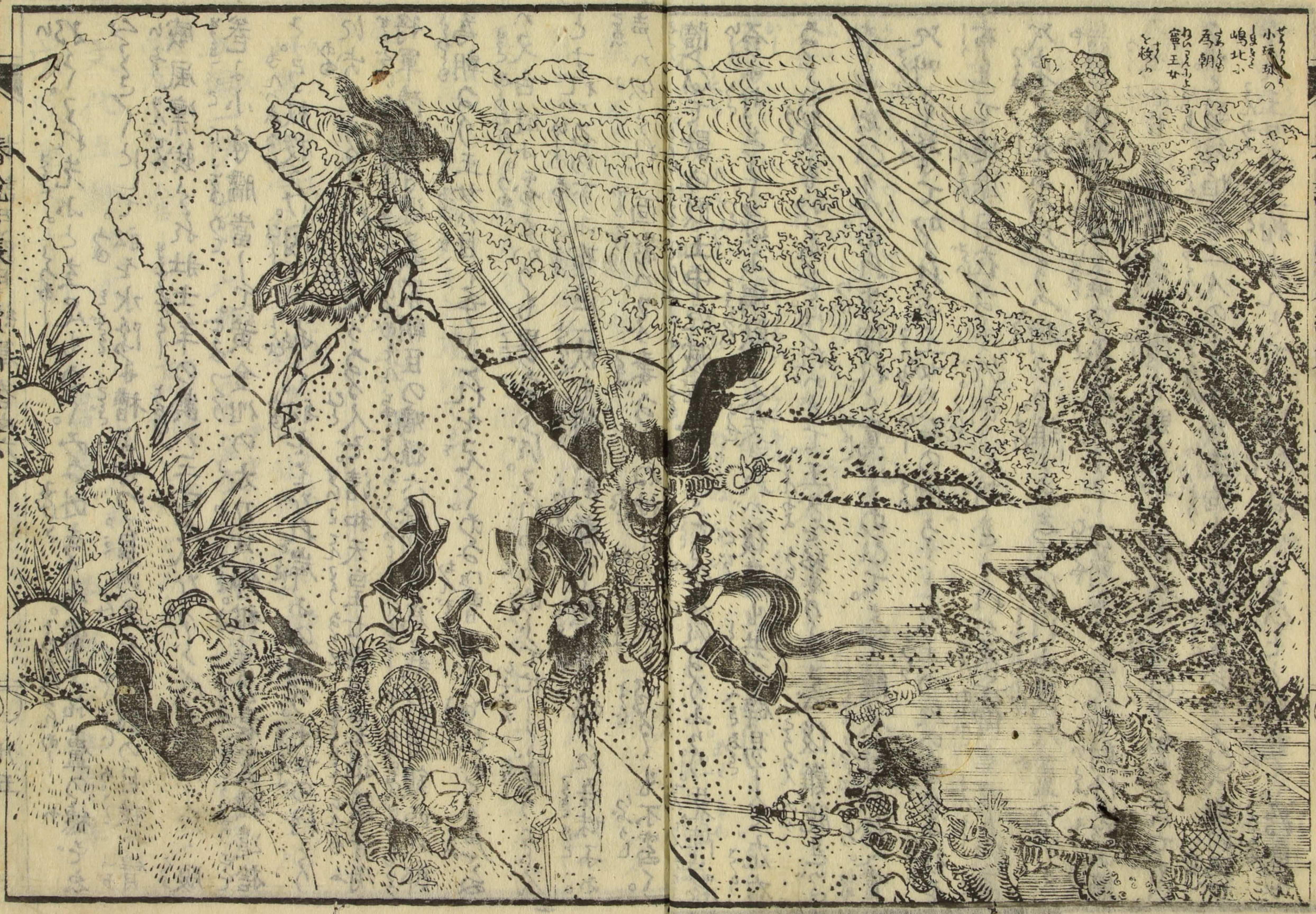
とくして王女お勧め進しりし同胞もうち食くひく。主後しちうちやくお餓えひ  
 峻あれ日暮ひるとハ松蔭しょうゆや倚より。臥ふしむひめて夜よをあけしけ二日じつ  
 二日じつとよ一いちまあふ茅ちの三日じつあ至いたりて水鳥すい夥物たは駭おれとれううら  
 こるこ次つぎさしてお耳みみさけしうう王女おんハこれやうち瞻まりて眉まゆを聳たげ翹たよ  
 宣のたまふやうう船ふねもかよりの里さとも遠とほれか入い江えふ棲すむるの慌あわしく群ぐん  
 ぶらぶら怪あやしそや蒙も雲うんが賊兵ぞくホこくに追おひ逼おりぬとおおあ  
 るへと宣のたまふその言ことい事こと統とらと四五十人の賊兵ぞく嶋し酋しう長ちやう御導ご導とは  
 く。蒼あさ直ちよくおしうせ夏なつの轉ひくところ困まり。王女おんと生拘せいとんとい閑  
 くあぞ主従しゆじゆの事こと急いそはして舊ふるの船ふねお乗のりもほぞ今いま脱だげしとえ  
 紹しやうくつつ鰐う龜かめへういひしく。とむ敵てきやうう隔へりあらうらうらう。防かは  
 戦いくさお後あと少せう年ねんと名なひ悔あやり。破やぶとらうらうらうの五六人ご及およべり。えんば  
 と。同胞どうが十五じふごあざも足ありあり小腕せうあて目めおあある賊兵ぞく防か  
 だ置おべたやうも形かたちく。後あとふ力ちから衰おとろへ勢いきほひ究まり。兄あにも弟あにも生拘せいとん  
 賊兵ぞくホる。やんく勇ゆうにて既すでに王女おんと捕捕とらん。とすすふ王女おんハ心こころ地ぢ  
 奪うばりありて。近ちかよる敵てきや左ひだり右みぎへ撲う地ぢと投退な起たりもえとて剣けん  
 を抜ぬく。むとてとんと破やぶく。勢いきほひ猛まくまらふ賊兵ぞくホへこれを  
 んと大おほま驚おどれされがこそはしと違ちがひ。王女おんハ神かみの憑つく狂くるとらそ  
 ぞ禍わざ獸けをけり。嚙くはとらさせよ。異こと口くち同音どうに叫よぶよい。とらとら  
 後陣ごより。彼惡獸あを放はなす。鼓つづみを鳴なげし閑ひまの声を揚あげ人ひとと獸けと力を  
 裁あり。又またはくくと鏡かがみひ蒐くる。寧ねい王女おんハ物ものともせと劍けんをとらとら  
 て。彼禍獸あを刺さんとし、刃やいばハ鏢せう際せより唇くちと折をれ、鞆たむのみ主しゅ  
 の身みお残のこり。今いまハかうとおおせえ。後あとよああ閃ひらりと飛とび赤瀬あかの

春記月長月續卷之二

九二







小環の  
鳴北  
為朝  
寧王女  
と枝

本誌曰、張戸、綿、竹、芥、之、六

ねえ。それ先小と立足もろく。みる逃まりぬ。當下枯蘆の穂ぞえ  
 ぐさくとして。私を水際舟槽よせつ。身の丈七尺射の目猿の臂  
 威風凛然。然れ壯士年の齡ハ。三十七八なるらん。とおほし腹  
 巻よ小舟。騰當して。黄金作の太刀次。佩被る。兼い掻遣捨  
 ぐ。弓杖投之け。閃りと飛ぶ。私をそなれ。岸おのほり。王女のほり  
 によこさる。これハ是いうる人ぞ。清和天皇七世の皇孫鎮守府  
 將軍陸奥守源義家朝臣の嫡孫六條判官爲義の八男鎮西八郎  
 為朝なり。王女ハ目と名くこれをえと。ある曹司と。びびかくる。声ぞぬ  
 ハ又白縫ふ。あむかりも異なり。これおもあて忙しく。走りよるん  
 とすれ。石の下ふ布。且し袂も拂と。對離る。契りの始り。吾妹子ハ  
 声ハ似それ。と面影ハ。つら妻あり。ね他一人。ハ夫と。も不空く。  
 為朝ハ。むじら。観る。てい。之れ。こも。な。かり。け。抑。為。朝。ハ。ゆる  
 八月十六日。風濤の難小係。私破れ。妻子沈淪。その身。續岐院  
 の冥助あり。て。脱と。う。死を。脱れ。そ。よ。来。る。ま。で。の。物。が。ら。ハ  
 捨遣篇の首小説起と。續ひて。ま。し。

椿説弓張月續編卷之六 畢

此書ハ曲亭翁の著述にて。北斎主人の繡像とあり。凡  
 五編一帙ハのく六冊。て。て。全。本。と。既。ハ。海。内。に。發。行。せ。り。  
 四方の看管あり。高評を仰ぐ而已。

文化五稔歳次  
 戊辰季冬吉朝  
 本所松坂早  
 書賈  
 平林庄五郎梓

